心機一転！
転生王女のお気楽流刑地ライフ

CHARACTERS
登場人物紹介
フィン
流刑地であるヴォアラ島の集落の長。カリスマ性と生命力に溢れた面倒見のいい美丈夫。
ルチア
リーデント王国の元王女。転生者で、前世の記憶を持っている。儚げな見た目に反して思い切りのいい少女。
マルクス
料理担当の青年。外の世界へ出ることを夢見ている。
オリバー
ルチアの元婚約者。彼女を崇拝しており、婚約者らしい関係は築けていなかった。
ジュリエッタ
ルチアの親友の公爵令嬢。いつも明るく、ルチアの心の支えだった。
カミーユ
フィンの母。ロートランド国の元王太女で、女王様然とした美女。
ノア
ルチアより少し前に島へ流されてきた少年。訳ありらしく人を避けている節がある。
アーノルド
浮世離れした画家。島にはろくな画材がなくまともな絵を描けていない。

目　次

心機一転！　7
転生王女のお気楽流刑地ライフ　265
前世持ちの彼女が流刑地へ向かうまでの過程

心機一転！
転生王女のお気楽流刑地ライフ

第一章　流刑地一日目、午後

生命が無限に転生を繰り返す様子を車輪の回転にたとえて輪廻（りんね）という。
宗教的あるいは哲学的な考えだが、自分は誰それの生まれ変わりで、前世の記憶を持っていると主張する人間は少なくない。
とはいえ、せっかく前世から持ち越したというその記憶を、今世で上手く立ち回るために活かせる者は、はたしてどれほどいるのだろうか。
少なくとも、彼女――ルチア・リーデントはだめだった。
だから今こうして、濃密な緑に支配された世界を掻き分け、前へ前へと進んでいる。
その頭上を天蓋（てんがい）のように覆（おお）うシダの葉の隙間から、西に傾きかけた太陽の光が差し込む。
南国の太陽は色素の薄い瞳には強過ぎて、彼女は銀色の前髪の下で薄青の目を眩（まぶ）しげに細めた。
鬱蒼（うっそう）としたジャングルに、ビスクドールみたいにか弱そうな姿は不釣合いでしかない。いかにも深窓の令嬢といった雰囲気だが、その身に纏（まと）うのは飾り気のない黒いワンピースと、日除け代わりに頭から被せられた男物のシャツだけだ。
とはいえ、ルチアが現状を憂（うれ）えている様子はない。

それどころか、すぐ横の木の幹（みき）へ絡み付く蔓（つる）にルビーのように真っ赤な実を見つけたとたん、ぱっと顔を輝かせた。ルチアはシャツの下から手を伸ばし、その果実を採ろうとしたのだが……
「――やめておけ、死ぬぞ」
下からぴしゃりと告げられ、慌てて手を引っ込める。
そろりと下を見たところ、声の主の青い瞳と視線がかち合って、やめておけ、と重ねて首を横に振られてしまった。
「採ってはだめですか？」
「だめだな。背中で人に死なれたくはないので、諦めてくれ」
相手はルチアよりも幾分年上に見える若い男で、甘い甘い蜂蜜色の髪と健康的な小麦色の肌をした美形である。
ルチアは現在、その男に負ぶわれた状態で、草木が茂（しげ）るジャングルの中を進んでいた。
広い背中は安定感があり、彼女の尻を支える腕も筋肉質で逞（たくま）しい。
とはいえ相手は父でも兄でもなく、幼子のように運ばれるのはルチアにとって本意ではなかった。ぶっちゃけ、照れくさい。
そんな彼女の気持ちを知ってか知らずか、男は言い聞かせるみたいに告げる。
「それはヘビノチという名の猛毒の実だ。口に入れたら最後、舌も食道も胃も爛（ただ）れて水さえ飲めなくなる」
「ヘビノチ……〝蛇の血〟ですか。それは物騒ですね、覚えておきます」

聞き分けのいい振りをしながらも、ルチアはがっかりしていた。
ぎゅっと寄り集まった小さな粒の中には赤い果汁がパンパンに詰まっていて、彼女の古い記憶――前世で摘んだ木イチゴそっくりであるにもかかわらず、食べられないというのだ。
そう、生まれてこの方、誰にも打ち明けたことはないのだが、ルチアには前世の記憶があった。
ただそれは完璧ではなく、随分と虫食いがある。例えば前世での自分や家族の名前なんかはまったく覚えていないし、どういう最期を迎えたのかも定かではない。
しかしながら思考や情緒、価値観などといったものは今世に持ち越しているようで、現在十八歳のルチアは実際の年齢や見た目に反して、かなり人生を達観していた。
見た目詐欺も甚だしいヘビノチから視線を逸らし、ふうと物憂げなため息を吐いた彼女に、下から伸びてきた手が別の木の枝にぶら下がっていた黄色い実を掴いで渡してくれる。
ヘビノチと形状はそっくりだが、こちらはヘビノミツといって口にしても問題がないらしい。
男に礼を言い、嬉々としてそれを口に含んだルチアだったが――次の瞬間、顔を顰めて叫んだ。
「――すっっっぱい！　わわわ、すっぱいですよ!?」
「はは、食えるとは言ったが美味いとは言ってないだろう？」
「でも、すっぱいって教えてくれてもよかったと思います！　あああ、すっぱーい！　これの名前が〝蛇の蜜〟って……詐欺ですかっ!!」
「そのすっぱいのがいいんだぞ。そいつに含まれる酸はミネラルの吸収を助けるから、熱中症予防になる。ここの気候に慣れていないお前にはちょうどいいだろう。まあ、普通は甘味を加えてジャ

ムにして食うんだがな」
ひどい！　すっぱい！　と叫んでルチアが男の肩をバシバシと叩くが、彼は少しもこたえた様子がない。それどころか、ははは っと声を上げて笑うものだから、悔しくなったルチアは顎の下にある彼の蜂蜜色の髪をぐしゃぐしゃに掻き回してやった。
とまあこんな風に、随分と打ち解けているように見えるルチアと男だが、実のところ小一時間前に出会ったばかりという間柄だ。
ルチアが彼について知っていることといえば、フィンという名前と、この鬱蒼としたジャングルを抜けるには彼の存在が不可欠だということくらいである。
フィンは頭をボサボサにされても構わず笑っていたが、やがてまた傍らの木に片手を伸ばし、今度は赤紫色をした小さな実を摘んだ。
「そら、口直しにこれをやるから機嫌を直せ。あまり背中で暴れてくれるな」
「今度のはすっぱくないですか？　いくら無害でも、辛いのとか渋いのとかも嫌ですよ？」
「心配しなくても、こいつは甘くて美味いぞ。味は俺が保証する」
「本当に本当なんですね？　もしも嘘だったら、髪の毛を全部むしりますからね!?」
ルチアはおそるおそる赤紫色の実を受け取ると、目の前に翳してまじまじと眺めてみた。形状はブルーベリーに近い。
この実はヘビノメと呼ばれていると聞いて、また蛇にちなんだ名前なのかと警戒を強めたものの、それが発する甘酸っぱい香りに自然と喉が鳴った。

誘惑に抗えず、ちびりと前歯で齧ってみる。すると、硬めの皮がぷしゅりと弾け、中からどっと果汁が溢れ出した。

「あ、甘い！　本当に甘い……」

フィンの言葉に嘘はなかった。あまりの美味しさに顔を輝かせたルチアは、実をまるごと口に含んで咀嚼する。

そして今さっき自分が乱したフィンの蜂蜜色の髪を、褒めるみたいに撫でて整えた。

「よしよし、機嫌は直ったな。王女殿下の口に合ったようで何よりだ」

「あら、私はもう、王女なんかじゃないですよ」

ヘビノメの実をごくんと呑み込んだルチアはフィンの言葉を否定する。それから、太陽の香りがする彼の頭に顎を載せて、何でもないことのように告げた。

「――今の私は、一国の王を殺害しようとした重罪人ですもの」

ここは南の海の果てに浮かぶ絶海の孤島、ヴォアラ島。

ルチアは今から十八年前、この島よりずっと北に位置する大陸内地の君主制国家リーデント王国にて、前王の長女として生を享けた。

ところがこの度、腹違いの兄である現国王フランク・リーデントの謀殺計画に加担し、毒杯を渡したことで流罪を言い渡され、このヴォアラ島にやってきたのだ。

島の周辺には無数の岩礁が突き出ている。そのため、ルチアを護送してきた大型帆船は沖に留ま

り、彼女は一人小舟に乗り換えさせられた。海流の影響だろうか、漕ぎ手がいなくても小舟はすいすいと島に向かって流れた。

そうして、ルチアが砂浜に到着するのを見届けると、大型帆船は船首を返して去っていってしまったのだ。

ヴォアラ島の白い砂浜の奥には鬱蒼としたジャングルが広がっていて、文明を拒んで久しく見える。

過去、幾人もの罪人がこの島に送られた。リーデント王国のみならず、大陸のありとあらゆる国々がヴォアラ島を流刑地として利用してきたのだ。

流刑者の多くは王侯貴族出身の政治家や文化人。それまで何不自由なく暮らしていた人間を、着の身着のまま僻地に放り出すなんて、死ねと言うのと同義だろう。

現在、大陸のほとんどの国では死刑が廃止されているが、一瞬で首を落とされるのと、未開の地に置き去りにされて孤独に死を待つのとでは、一体どちらの刑が重いのか。

そんなことを考えながら、ルチアはしばらくの間、遠のいていく大型帆船を見送っていた。

そして、いよいよその影が水平線の向こうに消えようという頃のことである。

『そこのお前、遭難者か？　それとも――大陸からの流刑者か？』

ガサガサと木々を掻き分けてジャングルの奥から現れ、いきなり問うてきたのが、今まさに彼女を背負って歩いているフィンだった。

『流刑者ですけど……ええっと、あなたは……人間ですか？』

『随分な質問だな。人間以外の何に見える？』

この第一島人発見に、ルチアは喜ぶよりもまず驚いた。というのも、ヴォアラ島は無人島だと勝手に思い込んでいたからだ。

煌びやかな王宮の奥に大事に仕舞われてきた自他共に認める箱入り娘だが、無人島でたった一人サバイバル生活をして、生きられるだけ生きてやろうと決意を固めていた手前、突然の住民登場には少々拍子抜けした。

もちろん、最初はルチアも警戒したのだ。相手は男性で、しかもルチアなど小指の先で捻り潰せてしまえそうなほど逞しい。

思わずじりじりと後退った彼女に小さくため息を吐いたフィンは、害意はないと主張するためか両の掌を広げてみせた。

『とりあえず、砂浜から離れることをお勧めする。そこは日差しがきつかろう。お前、帽子も何も被ってこなかったのか？』

『日差し？　……そういえば、何となくヒリヒリします』

ルチアは銀髪に薄青の瞳、肌は透けるように白い。日照時間が短く太陽の光が弱いリーデント王国では問題なかったが、それとは対極の状況にあるヴォアラ島では確かに辛いものがある。

おそらく、護送中に付けられていた世話役は、この強い日差しを見越して彼女に黒いワンピースを着せたのだろう。しかし帽子までは頭が回らなかったのか、無防備だった頭皮や鼻の頭がわずかに痛んだ。

無意識に鼻の頭を擦ろうとした彼女の手を、さっと伸びてきたフィンの手が掴む。
大きくて、骨張っていて、小麦色で、そして温かな手だ。
『よせ、擦れば皮が剥ける。後で真水で冷やしてやるから、少しだけ我慢してくれ』
ルチアを強引に引き寄せたフィンは、自らのシャツを脱いで彼女の頭に載せた。これが、ルチアが男物のシャツを被るに至った顛末である。
初対面の相手から与えられた親切に戸惑うルチアは、このまま彼に従っていいものか迷ったが……
『満潮になれば砂浜全てが海水に浸かるぞ。もう一度言うが、砂浜から離れることをお勧めする』
『離れます』
砂浜を離れるということはすなわち、ジャングルに踏み込むということだ。
ジャングルを行くには土地勘があるフィンの案内は不可欠で、ルチアは必然的に彼と行動を共にすることとなった。
ところが、少しも進まないうちにルチアの歩みが止まる。慣れない獣道で早々に靴擦れを起こしてしまったのだ。とたんに消沈する彼女に、フィンはさっとしゃがんで背中を向けた。
『ほら、負ぶされ』
『でも……』
『背負われるのが嫌だと言うなら、抱いていくが？　こんな場所で日暮れを迎えるのはご免だからな』

『……失礼します』
こうしてルチアは観念し、全面的にフィンを頼ることにした。
現在は、もはや彼を警戒するのも馬鹿らしく、自分とは違って逞しい背中にすっかり身を任せている。
そんな二人の頭上を突然大きな影が横切り、生い茂ったシダの葉を揺らして止まった。
赤、青、黄色と原色をまとったやたらと派手な見た目の、これぞ南国といった感じの大きな鳥が、ギャーギャーと耳障りな声で鳴き出す。
その声につられるように周囲を見回したルチアは、フィンの肩をぺちぺちと叩いて問うた。
「ねえ、フィン。あの鳥は食べられますか？」
「食えんこともないが、捕まえるのは至難の業だぞ」
「じゃあ、あっちの枝にいるトカゲは？　あれは美味しいですか？」
「あれは……俺も食ったことがないので知らん。というか……もしかして腹が減っているのか？」
顔だけ振り返ってそう問うフィンに、ルチアはいいえと首を横に振る。
「今は特には。でも無人島では、食べられるものを食べられる時に食べておかなければ生き残れないんでしょう？」
「そもそも、ここは無人島ではないんだがな。誰かがそう言っていたか？」
「本に書いてありました。祖国で拘留されている間はとにかく暇だったので、幼馴染のジュリエッタがいろいろ差し入れてくれたんですけれど、その中で唯一実用的だった本です。確か、『無人島

で百日間生き残る方法』とかいう題名の……」
「その題名通りだとすれば、結局は百日間の生存しか保証されないみたいだが？」
リーデント王国の重鎮アマルド公爵家の令嬢ジュリエッタはルチアと同い年で、お互い赤子の頃からの付き合いだ。
あぶあぶと擦り寄ってきた赤子のジュリエッタを見た時、ルチアは不思議と初めて会った気がしなかった。何か運命的なものを感じ、好感度は最初から最高だったように思う。
彼女は常に前向きで陽の気に満ち溢れていて、陰鬱とした王宮の中で唯一、ルチアが一緒にいて明るい気分になれる貴重な相手となった。
そんなジュリエッタが件の本を抱えてきた時は、ルチアだってフィンと同じ感想を抱いたが、それを口にすることはなかった。
何故なら、彼女がルチアの行く末を心から案じてくれていたのは明白で、『百一日目以降はどうすればいいのよ』なんて無粋な指摘をしてその厚意に水を差したくはなかったのだ。
「いいんです。ジュリエッタに他意はなかったはずですもの。もしも無人島に何でも一つだけ持っていっていいと言われれば迷わず彼女を選ぶくらい、私にとって大事な子なんです」
「箱入り娘が箱入り娘を連れてきたところで、お互いに足手まといにしかならないと思うがな」
「あらま、分かってないですね。ジュリエッタは存在すること自体に意味があるんですよ？　彼女と一緒なら、きっとどんなところでだって面白おかしく生きていけそうな……ええ、そんな気がしたんですけれど……」

「……おい？　どうした？」
ふいに言葉を切ったルチアの顔を、首だけ振り返ったフィンが気遣わしげに覗き込む。
偶然にも彼の瞳が幼馴染のそれと同じ色をしているのに気付き、ルチアは苦笑を浮かべて続けた。
「結局は、こんなに遠くへ来ちゃいましたし……ジュリエッタの方も、私がリーデント王国を発つ前日に他国へ嫁いでいってしまいました」
ジュリエッタの夫となるのは友好国マーチェス皇国の皇弟で、もちろん親が決めた政略結婚だ。貴族の娘に生まれた以上、面識もない相手に嫁ぐことを殊更嘆いている様子はなかったジュリエッタも、ルチアとの別れには滂沱の涙を流していた。
今世の別れになると知りつつ、またね、なんて言葉を交わした自分達は、傍目にはさぞ滑稽に映っただろう。
「……寂しいのか」
「寂しい……でも、仕方がないんです。ジュリエッタは公爵令嬢として与えられた役目を全うし、私はそれを見送ることしかできなかった……」
ジュリエッタがいなくなったとたんに、ルチアの世界は色褪せてしまった。
もともと前世の記憶があるせいで、今世をどこか他人事みたいに感じていたこともあり、ルチアは生への執着が薄い。
しかし、だからといって、世を儚んで自ら命を絶つような真似はしなかった。
ジュリエッタの厚意に報いるためにも、せめて百日間は流刑先で生き延びる覚悟でルチアはここ

まで来た。食べられるものは食べられる時に食べるし、頼れる人は頼れるだけ頼るつもりだ。
そうして、いつか今世を終えれば、また記憶を持ったまま別の人間に転生するということもあり得るかもしれない。一度あることは二度あると言うのだから。
とにかく、今世のルチアは生まれながらに不幸を背負わされていたので、願わくは次の人生に期待したいところだった。

ルチアは前世でも女として生まれ、〝日本〟という島国の、ごくごく一般的な家庭に育った。
ジュリエッタみたいに唯一無二と言える大親友な幼馴染もいたし、恋もした。
休日には家にいる日の方が少ないくらいのアウトドア派で旅行が趣味。日本を飛び出していろんな国に行ったが、同行者はもっぱら恋人ではなく幼馴染だった。
前世がどういう最期であったのかは、とんと思い出せない。そのため、ぱっと目を覚ましたらいつの間にか新しい命に生まれ変わっていて心底驚いたし、自分が置かれている状況がまったく理解できなくて戸惑った。意識は成熟した大人のままなのに、身体は生まれたばかりの赤子になっているのだから無理もなかっただろう。
当初、ルチアはパニックに陥って散々泣きわめいたが、そもそも赤子が泣くのは普通のことなので誰にも不審がられることはなかった。
しばらくして落ち着いてくると、彼女は現状を把握しようとした。
といっても、生まれて間もない赤子なので、視界は不鮮明だし、しゃべれるはずもないので誰かに状況を尋ねることもできない。
仕方なく耳をそばだててみたものの、今度は言葉そのものが理解できないことに気付いた。
どうやら自分は日本とは違う国に生まれ変わったらしい。
そう悟ったルチアは開き直り、再び周囲を注意深く観察し始めた。
会話の内容が理解できなくても、声の調子や雰囲気で何となくその人の心情を想像することは可能だ。
ルチアはやがて、自分の周囲が何やら大きな悲しみと絶望に包まれていることを知った。
「私が生まれて十日後のことです。二人の兄達が乗った馬車が事故に遭い、一人が――私と母を同じくする兄が亡くなりました。彼は第一王子で、八歳ですでに立太子していたそうです」
「なるほど。第一王子が幼くして亡くなったために、第二王子だったお前の腹違いの兄上がリーデント王国の国王として立つことになったんだな」
自分の生い立ちを説明するルチアを背負ってジャングルの中を進んでいたフィンの足は、日が落ち始めたことを理由に停止した。
夜のジャングルは方向が分かりにくいばかりか、夜行性の動物と接触する危険もあるため、安全な場所で朝を待つべきだと彼が言う。
そうしてルチアが連れてこられたのは、ジャングルの中を流れる小川の畔に立った、一本の大きなマンゴーの木に作り付けられたツリーハウスだった。
頑丈なマンゴーの木の上、青々と茂った葉っぱに埋もれるようにして木組みの小屋が載っている。

小屋の内部は、十畳ほどの大きさだった。
床には籐を編んだ敷物が敷かれ、板張りの天井は虫除けなのか燻したみたいに黒くなっている。
入り口とは別に窓が一つ開いていて、ここから木に生ったマンゴーの実に手が届くという合理的な設計だった。
日本だと、フルーツキャップを被せて綺麗な箱に詰めれば一個三千円はしそうな立派な実だが、ここでは取り放題だ。ルチアが嬉々として捩ぎ取った実は、フィンがナイフで器用に皮を剥いて切り分けてくれた。
とたんに鼻腔へ届いた芳醇な香りに自然と笑みが零れる。しかし、そんなルチアが続けるのは、楽しい話では決してなかった。
「兄の死の報せを受けた衝撃で、もともと私の出産で体調を崩していた母の心臓まで止まりました。私は同じ日に、母と兄の両方を失うことになったんです」
その日、前リーデント国王は、側妃と二人の王子を連れて森へ狩りをしに出かけていた。
正妃と側妃の関係は案外良好で、母親違いの王子達も実の兄弟のように仲が良かったという。
ところが目的地に辿り着く直前で一行を乗せた馬車が暴走して横転。車窓から外に投げ出された第一王子が亡くなった。
一方で、第二王子は無事だった。同乗していた彼の母である側妃が身を挺して庇ったからだ。
これが後に、大きな物議を醸すことになった。
「大方、自分が産んだ第二王子だけ守って、正妃が産んだ第一王子の方は見殺しにした、とでも世

間が騒いだんだろう」
「ご明察です。上の兄が亡くなったことで、必然的に王位継承権は下の兄に移りましたから、余計に。それどころか、最初から王太子を謀殺するつもりで馬車に乗せたんじゃないかと疑う者までおりました」
「実際、その可能性はまったくないと言えたのか？」
「そもそも馬車が暴走したのは、手綱の操作を誤ったからなんです。その時の御者が側妃の息のかかった者ならば可能性はあったかもしれませんが――手綱を握っていたのは、父ですもの」
つまりは、前リーデント国王の不注意により馬車は暴走し、その結果、第一王子が亡くなったのだ。責められるとしたら、それは事故を起こした前リーデント国王だろう。
側妃はむしろ、一人でも王子を守ったことを称賛されてしかるべき。それなのに、生き残った母子に世間の目は冷たかった。
正妃と第一王子を失ったショックで前リーデント国王まで心を病んでしまい、第二王子は早々に立太子して玉座を譲られることになる。だが、当初は大臣達ばかりか侍女や侍従までもが陰口を叩いた。
「きっと、兄上様は針の筵に座らされているも同然の心地だったと思います。幸い、優秀な側近の助けで立派に国王を務められ、今では国民の多くが賢王と讃えるようになりましたが……」
兄王の苦労に思いを馳せつつ浮かない顔でそう告げたルチアの口元に、切り分けられたマンゴーの実が差し出される。皮を剥いて手が果汁塗れになったついでだと、フィンが手ずから食べさせて

くれるらしい。
常識的に考えれば、出会ったばかりの異性にしてもらうことではない。さしものルチアも照れくさいのだが……
「いいから口を開けろ。王女殿下は他人に世話されることくらい慣れているだろう？」
「さすがに、食べ物を口まで運んでもらったのはほんの幼い頃だけです」
「なら、幼い子供に戻ったつもりで食べさせられていればいい。どうせこの島に来たばかりの今のお前は、右も左も分からない幼子と変わらん」
「……いただきます」
フィンに敢え無く論破され、ルチアはしぶしぶ従う。
ところが、口に含んだ瞬間広がったマンゴーの濃厚な甘味に、彼女の頬は意思に反してふにゃりと綻んだ。
それに満足げな顔をしたフィンが問う。
「腹違いの兄上に対して随分と肯定的なんだな。それに、結果的には同腹の兄上を庇わなかった側妃にも思うところはないのか？」
「上の兄の記憶はまったくありませんから、正直な話、私にとって兄上様は下の兄だけですもの。王太后様だって、上の兄を庇わなかったんじゃなくて、状況的に庇えなかったんです」
ルチアの二人の兄達は、もともと正反対の性格をしていたという。
あの事故の際も、第二王子が大人しく座席に着いていたのに対し、活発な第一王子はいくら側妃

が注意しようとも言うことを聞かず、窓から身を乗り出していたらしい。
後に、前リーデント国王と共に御者台に座っていた侍従がそう証言したおかげで、側妃を批難する声もだんだんと収まっていった。
ただし、どうあっても現国王フランク・リーデントを認めたくない輩もいたのだ。
その筆頭が、正妃を輩出したレンブラント公爵家の当主――ルチアにとっては大叔父に当たる人物と、ルチアの母の乳姉妹であり亡くなった第一王子とルチアの乳母を務めた人物だった。
レンブラント公爵家は、ルチアの親友ジュリエッタの生家であるアマルド公爵家と並ぶ、リーデント王国の名家中の名家である。
一族の血を引いた王子が国王となる夢を断たれたレンブラント公爵は、代わりに立ったフランクをひどく妬んでいた。
また、息子も同然だった第一王子を失い、それによって実の妹のように可愛がっていた正妃まで亡くした乳母の悲しみは凄まじく、その感情は怨嗟となってフランクとその母に向けられたのだ。
そして、ルチアはそんなレンブラント公爵と乳母の恨み言を子守唄代わりにして育った。
そこまで聞いたフィンが、マンゴーの果汁に塗れたナイフを布で拭いつつ、感心したように言う。
「その環境にあって、よくお前は兄上や王太后を恨まずにいられたものだな」
今更ながら、曲がりなりにも一国の王女として生を享けたルチアは、これまで〝お前〟なんて呼ばれ方をしたことがなかった。
ただし、一般人だった前世の記憶があるおかげで、フィンの物言いに戸惑うことも、ましてや気

分を害することもない。
レンブラント公爵や乳母に関してもそうだった。
フランクとその母への恨み言を散々聞かされて育ったのだから、普通だったらルチアもそれに多大な影響を受けて兄達を恨んでもおかしくなかっただろう。同腹の兄や生母の仇、と強い憎悪を植え付けられていたかもしれない。
けれども、赤子の時点で前世の記憶があり、精神年齢はすでに成人に達していたのが幸いした。
「大叔父や乳母の話と、周囲の話とを冷静に聞き比べてみれば、どちらが間違ったことを言っているのかは明白でしたもの。理不尽な恨みや憎しみを向けられる兄上様と王太后様は、本当にお気の毒でした」
それでも結局、訳あって兄王フランクの謀殺計画に加担したから、ルチアはこうして流刑となった。
ただ、毒杯を渡したとはいっても、フランクはそもそもそれに口を付けていないので無事だ。
奇しくも当時、国王の護衛に当たっていて謀略を暴いた国軍少将オリバー・レンブラントは、レンブラント公爵の孫でありルチアの婚約者だった。
その後、婚約は解消されたので、ルチアの存在が国王を救った英雄である彼の出世を妨げることはないだろう。
首謀者であるレンブラント公爵は、計画が露呈した時点で国外逃亡を図ったようだが、すぐに捕まり、ルチアと同等かそれ以上の重い罰が下されたはずだ。彼の最終目標は、フランクを殺してルチアを女王に押し上げることだった。
そして、レンブラント公爵と結託して暗躍していた乳母は、ルチアが拘束されたと知って早々に毒を呷ったと聞いている。
何にしろ、赤子の頃からルチアの耳元に代わる代わる呪詛を吹き付けていた彼らは、もう側にいない。
王女としての地位も名誉も財産も何もかもを失ったが、その代わりにルチアは今世で初めて自由を得たのだ。
「薄情だと思われるかもしれませんが、記憶にない母や兄が恋しかったことなんて一度もありませんでした。それなのに、周囲はこぞって私を薄幸の王女に仕立て上げ、可哀想だと哀れむばかり」
流刑に処されたのは、ルチアにとってはある意味計画通りだった。
もともと国王謀殺が未遂で終わったことと、王族は死刑にならないという慣例から、国外追放が妥当だろうと考えていたのだ。
十八年間王女をしてきた身ではあるが、一般人として生きた前世の記憶があるおかげで、ルチアはどこに追いやられてもやっていけそうな自信があった。
「他人に哀れまれたまま人生を終えるなんて真っ平ご免ですよ。私は、可哀想なんかじゃない。そのことを証明するためにも、この島で生きられるだけ生きるつもりなんです」
それには、今目の前にいるフィンの助けが必要だ。
そう確信したルチアは彼に向き直り、畏まって告げる。

「どうぞ、よしなに」
「いいだろう。お前の命、俺が預かった」
フィンは力強く即答した。
ルチアの生い立ちを聞かされても、彼の表情には哀れみの色など一切浮かんでいない。
おかげで、ルチアは少しだけ清々(すがすが)しい気持ちになった。

第二章　流刑地一日目深夜から、二日目にかけて

「……何かしら？」
夜も更(ふ)けた頃のことだ。
ミシ、ミシ、と建物が軋(きし)む音で、ルチアは目を覚ました。
ツリーハウスの隅にはハンモックの寝床が一つあって、彼女はその上で横になっている。
今世ではもちろん、前世でだってハンモックで眠った経験はなかったのだが、疲れていたのか寝心地の善し悪しを確かめる間もなく眠ってしまったようだ。
ルチアにハンモックを譲ったフィンの方は、籐(とう)を編んだ敷物の上に直接寝転がっている。
夜のジャングルの光源は、空に輝く月だけだ。
ただし今宵(こよい)は新月間近のため、月の光は到底灯りの代わりにはならず、ルチアの目の前もほぼ真っ暗だった。
ミシ、ミシ、という音はいまだに聞こえている。
慣れないハンモックの上で何とかバランスをとりつつ上体を起こしたルチアは、目を凝(こ)らして辺りを見回した。
「……っ!!」

直後、上げそうになった悲鳴を必死に呑み込む。
風通しを良くするために開けっ放しにしている窓。その向こうから、爛々と輝く大きな目が二つ、ツリーハウスの中をじっと覗き込んでいたのだ。
その目がゆっくりと瞬いてルチアを捉えた瞬間、まるで金縛りにあったかのように全身が動かなくなる。
辛うじて自由が利く口を動かし、呑み込んだばかりの悲鳴を上げようとした、その時だった。
「――落ち着け、大丈夫だ。あれが襲ってくることはない」
そう耳元に囁く声と共にぐっと肩を抱かれ、ルチアはびくりと身体を震わせる。
いつの間にか起き上がっていたフィンが、自分の身体を盾にして、窓の向こうの目からルチアを隠した。
フィンの陰に庇われたルチアは、自分の身体の硬直が解けていることに気付き、おそるおそる彼の肩越しに窓の方を見た。
大きな二つの目はぱちくりぱちくりとしきりに瞬きながら、いまだツリーハウスの中を覗き込んでいるが、フィンの言う通り襲ってくるような気配はない。
やがて、眺めていることに飽きたのか、二つの目が消え、代わりに何やら極太の注連縄みたいなものが窓を覆った。
ツリーハウスがミシミシと音を立てているのは、それが周囲に巻き付いているせいらしい。
よくよく目を凝らすと、淡く白く発光するその表面にびっしりと鱗が生えているのが見えて、ルチアははっとした。
「もしかして、あれ……蛇、ですか？」
「ああ、そうだ。この島に人間が住み着くずっと前から生息していた大蛇だ――いや、大蛇だったもの、と言った方がいいか」
フィンにしては歯切れの悪い言い方に、ルチアは首を傾げる。
そうこうしている間に、ずっと響いていたミシミシという音が、ふいに止まった。
「……どうやら、ここを離れたようだな」
「えっ？　本当に何もしてこないまま？」
窓の方を注視するフィンの肩越しに身を乗り出そうとした拍子に、ルチアはバランスを崩してハンモックから転げ落ちそうになる。しかし、すかさずフィンに抱き留められて事なきを得た。彼はルチアを抱いたまま窓辺に寄る。
フィンにしがみついたルチアは、おそるおそる窓から外を見遣った。
新月間近の闇の中、ほんのりと白く光る長い長い身体をくねらせて、それはジャングルの奥へと静かに消えていく。
完全にその姿が見えなくなると、ルチアは知らず知らず詰めていた息を吐き出す。
フィンが宥めるように彼女の背をぽんぽんと叩いてから口を開いた。
「あれは、かつてこの島を支配した大蛇だ。しかしその肉体はとうの昔に滅び、今のあれはさまよう霊体でしかない」

「霊体って……つまり、あれは大蛇の幽霊ということですか？」
生まれ変わったこの世界と、前世の世界は、異なる世界にあるとルチアは考えている。そのどちらにおいても、彼女はこれまで幽霊なんて摩訶不思議な存在と出会ったことがなかった。
それなのに、いきなりＵＭＡめいた大蛇に遭遇したかと思ったら、それは幽霊であるというのだ。
「あの通り基本的には無害だが、遭遇して気持ちのいいものではあるまい。夜のジャングルにはよほどのことがない限り足を踏み入れないことをお勧めする」
フィンはそう告げると、窓から離れてさっきまで寝転がっていた場所まで戻った。
かと思ったら、ルチアを抱いたまま器用にハンモックに上がって横になってしまう。
ルチアはフィンの隣に転がされ、気が付けば彼の左の脇の下にすっぽりと収まっていた。
「あの……添い寝をしていただくような年ではないんですが……」
「言っただろう。今のお前は幼子と変わらんと。随分驚いたみたいだな。心臓がバクバク言っている」
「心臓……私の？」
「あれがここに現れる可能性があることを、あらかじめ話しておくべきだったな。すまなかった」
フィンに言われて、ルチアは自分の心臓が早鐘を打っていることを自覚する。何事も客観的に見過ぎる弊害か、彼女は自分の感情に対する認識に疎かった。
フィンの大きな掌が、ルチアの鼓動を宥めるようにゆっくりと背中を撫でてくれる。
彼のそんなところ――前世で言うパーソナルスペースの狭さに戸惑わないわけでもない。

けれども、意外にも自分以外の人間の体温が側にあることにほっとした。十八年間過ごした祖国を放逐されて、心細いという気持ちがどこかにあったのかもしれない。
されるがままの彼女の髪を手櫛で梳きながら、フィンが再び口を開いた。
「ヴォアラ島はな、かつては本当に無人島だったらしい。大陸から送られてきた流刑者はすぐにあの大蛇の腹に収まっていたからだ。この島はあれの巣であり狩り場――そして、流刑者を送る者達にとっては手っ取り早い処刑場だった」
寝物語にしては随分殺伐とした話題だ。
けれども、自身も流刑者であるルチアにとっては決して無関係な話ではない。時代が時代なら、彼女もあの大蛇の餌になっていたのだから。
大蛇のことを、人は〝ヴォアラ〟と呼ぶらしい。
ヴォアラが支配していたからこの島がヴォアラ島と名付けられたのか、それともヴォアラ島に住む大蛇だからヴォアラと呼ばれるようになったのかは定かではないという。
相変わらずルチアの髪を手慰みにするみたいに指先で梳きつつ、フィンは話を続ける。
「転機が訪れたのは、三百年ほど前のことだ。この島に初めて、流刑者の一人が住み着いた。――それが、俺の先祖だ」
「つまり、あなたのご先祖様はヴォアラに食べられずに済んだってことですよね？　戦ったんですか？」
ヴォアラの巣であり狩り場でもある場所で生き残れたということは、もしかしてフィンの先祖は

大蛇に勝ったのだろうか。
ルチアがわくわくしてそう問うと、フィンは呆れた顔をして「そんなわけがないだろう」とあっさり否定した。
「あんな大蛇にちっぽけな人間が一人で立ち向かって勝てると思うか？　やつの死因は自然死らしい。あんなにでかくなるまでの間、どれほどの長い年月を生きてきたのかは知らないが、おそらく寿命だったんだろうな」
フィンの先祖は、ある意味強運の持ち主だったと言えよう。
彼がヴォアラ島に到着する直前にヴォアラは寿命を迎えたようで、フィンの先祖は食い殺されずに済んだばかりか、その遺骸でもって飢えを凌ぐことができたのだ。
「ということは、あなたのご先祖様は大蛇を口にしたってことですよね？」
「まあ、そうなるな」
「幽霊になったら、もう食材にはできないんでしょうか？」
「……は？」
ルチアの質問は予想外だったのだろう。フィンは青い目をまん丸にして腕の中の彼女を見る。
「……あれに遭遇して、食えるか否かを問題にしたのはお前が初めてだぞ」
「あら、蛇の肉を食用にしている民族は少なくないですよ？　下手物に分類されるほどではないと思いますけれど」
「お前が見た目にそぐわないことばかり言うものだから、違和感が凄まじいんだが」

「人を見かけで判断するなんて愚の骨頂です」
ルチアはツンとしてそう返しつつも、一方ではフィンの言葉に同意する気持ちもあった。
とかく、今世の彼女の器はよくできていて、精巧な人形のように可憐だった。
別に自惚れているわけではなく、客観的な印象である。なまじ前世の人格が残り過ぎているために、ルチアにとって今世の身体はどうしても借り物めいて思えるのだ。
銀色の髪や薄青色の瞳といった、周囲に儚げな印象を与える色素の薄いパーツは、亡き母から受け継いだものらしい。母は見た目を裏切らぬ物静かな性格で、その命まで儚く散らしてしまったが、ルチアに彼女の二の舞を演じるつもりは毛頭ない。
何なら、母譲りの恵まれた見た目を利用して、強かに生きてやろうという気概さえあった。
「ああ、やっぱりさっきの子、幽霊にしておくのは勿体ないです。あの大きさで実体でしたら、しばらく食糧の心配をしなくて済みますのに」
「お前……本気であれを食ってもいいと思っているのか？」
すかさず頷いたルチアに、フィンは何とも言えない顔をする。
そんな彼に、実は蛇料理を食べた経験があると告げれば、いったいどんな反応をするものか。
ただしそれは前世の話で、蛇は蛇でもウミヘビを調理した沖縄のイラブー汁のこと。琉球王国では国賓を持て成すのにも使われたという立派な宮廷料理だ。
鱗が付いたまま燻製されて黒くなった胴体が、ぶつ切りで放り込まれたスープを思い出していたルチアは、どういう表情をしていたのだろうか。

フィンは初めて可哀想なものを見るような目をすると、彼女の頭をよしよしと撫でながら言った。
「明日、集落に戻ったら存分に美味いものを食わせてやるからな」

＊＊＊＊＊＊＊＊＊

朝は、何ごともなくやってきた。
大蛇ヴォアラの幽霊が再びツリーハウスに現れることもなく、ルチアはハンモックの上で穏やかに目を覚ます。
開けっ放しの窓からは、朝日がハンモックの真下まで差し込んでいて、ツリーハウスの中の気温も夜に比べてぐっと上がっている。
汗で首筋に貼り付いた髪を掻き上げつつ寝返りをうったルチアは、ここでやっと、昨夜一緒に眠ったはずの存在がいなくなっていることに気付いた。
「……フィン？」
急に不安になり慌てて上体を起こすも、敢え無くバランスを崩して床に転がり落ちてしまう。
「……っ、いたた……」
ドタンッと盛大な音が響いた割には、下に敷いた籐の敷物のおかげか、ハンモックの高さがそれほどでもなかったおかげか、肉体的ダメージは少ない。
一方で、自身の運動神経のなさを自覚して、精神的には多大なダメージを負った。

思い返せば生まれてこの方、ルチアは碌に走った経験もない。
アウトドア派だった前世と比べ、王女という型にはめられた今世の、なんと窮屈だったことか。
籐の敷物の上に投げ出された両の足は生っ白く、転んだ拍子にぶつけたのか右の肘がヒリヒリする。そんな自身の軟弱な姿にルチアがため息を吐いていると、バタンと大きな音を立てて扉が開いた。
「――おい、すごい音がしたが何があった？　大丈夫か⁉」
そう言って、ツリーハウスの中に飛び込んできたのはフィンだ。
彼はそのまま、ペタンと床の上に座り込んでいるルチアの側に駆け寄り片膝をつく。
そんな彼の顔を見上げ、ルチアは今度は安堵のため息を吐いた。
「眠っている間に置いていかれてしまったのかと思いました……」
「今朝になって置いていくくらいなら、最初から拾ってこないさ。なんだ、俺がいないことに慌ててハンモックから落ちたのか？」
「黙っていなくなるからいけないんです。だから、私がドジを踏んだのもあなたのせいです」
「それは失礼をした、王女殿下。どうか、お許しを……肘は、軽い打身といったところか。まあ、大事がないようで重畳」
ルチアの八つ当たりを軽く受け流しつつ、彼女の右肘を検分してフィンもほっと息を吐く。
彼はどうやらジャングルで朝食を物色してきたらしく、小脇に抱えた籐の籠には何かの実がいっぱいに詰まっていた。

そのうちの幾つかは、昨日ルチアが彼の背中に負ぶわれながら口にしたヘビノメだ。
小振りなそれらに交ざって、ちょうどルチアの拳ほどの大きさの丸い実もある。
フィンが赤黒くて固い鱗状の表皮を剥くと、中には乳白色をした弾力のある果肉が詰まっていた。香り豊かで濃厚な甘味とほどよい酸味があり、ルチアが前世で口にしたことのあるライチとそっくりだ。
しかし、フィンがそれを〝ヘビノキモ〟と呼んだため、ルチアはうんざりとした表情になる。
「また蛇にちなんだ名前……もしかして、果物達の名前の由来になってる蛇って、昨夜見たあの大蛇の幽霊ですか？」
「だろうな。大陸からやってきた俺の先祖にとって、この島で自生する植物はどれもこれも未知のものだったから、最も存在感のあったヴォアラにちなんで適当に名前を付けたんだろう」
「蜜と目と肝は平気なのに、血だけ猛毒だなんてややこしい。せめて、食べられるものとそうでないものをはっきり区別できる名前にすべきです」
「その意見はもっともだが、先祖も生き残るのに必死で細かい気遣いはできなかったんじゃないか。大目に見てやってくれ」
不平を並べつつもきっちり果実を腹に収めたルチアに苦笑しながら、フィンが差し出してきたのは彼女の黒いパンプスだった。
昨日海水に浸かった上に砂浜を歩いたことで砂塗れになっていたのを、ツリーハウスの袂に流れる小川で濯いで一晩乾かしていたのだ。

靴擦れを起こしていたルチアの踵も、ツリーハウスの備蓄品を用いてフィンが手当てをした。
彼が巻いてくれた布がクッションになって、今日は自力で歩けそうだ。
ようやくツリーハウスから下り、小川で顔を洗ってすっきりとしたルチアの頭に、フィンはこちらも備蓄品らしいつばの広い麦わら帽子を載せて言う。
「日が上り切って暑くなる前に集落へ着きたい。そろそろ出発するぞ」
こうして、ルチアの流刑地二日目は、ジャングルのまっただ中から始まった。
濃密な緑に支配された世界を、フィンの後に付いてひたすら進む。
早朝の日差しは昼間のそれよりも幾分優しい。昨日頭から被っていたシャツはフィンに返したが、つばの広い帽子のおかげで肌を焼かれる感覚はなかった。
「集落に住んでいるのは、ヴォアラが死んだ後でこの島に送られてきて生き残った流刑者の子孫なんですか？」
「大半はそうだ。しかし近年も稀に、新たに流れてきた者が集落に加わることがある。お前のようにな」
「私が言うのもなんですが……よそ者を簡単に受け入れていいんですか？　流されてくるのは罪人なのに？」
「自分が受け入れてもらえるか、心配しているのか？」
育ち過ぎて自重に耐えられなくなったのか、大きなシダの葉が地面に倒れ込んで道を塞いでいた。
それを端に除けて道を作りつつ、フィンが続ける。

「ここに送られてくるのは基本的に政治犯だ。中には明らかに冤罪の者や嵌められて失脚した者もいる。島の人間に害をなすような凶悪犯は、ここには来ないさ」
「私は冤罪でも嵌められたわけでもない――毒杯と知りながら兄上様にそれを差し出した正真正銘の罪人です。それでも、受け入れてもらえるのでしょうか？」
ルチアがそう呟いたとたん、フィンは立ち止まって振り返り、彼女をじっと見つめた。
そして、どうにも腑に落ちないんだが、と口を開く。
「昨日聞いた話では、お前はもともと兄上を疎んじていたわけではなく、むしろ好意的だった。それなのに、いったいどうして大叔父や乳母の謀略に乗って兄上を手にかけようとする事態になったんだ？」
道案内役が立ち止まってしまうと前には進めない。必然的にルチアも足を止め、彼の質問に答えることになった。
「大叔父と乳母は当初、兄上様に毒杯を渡す役目を、一族の妾腹の侍女に負わせようとしていました。兄上様の殺害が失敗しても成功しても、彼女が全ての罪を被って断罪されるという算段で」
「……なるほど、その侍女は体のいい捨て駒か」
苦虫を噛み潰したような顔をするフィンに、ルチアは肩を竦めて頷く。
一族の中で立場の弱かった侍女は、レンブラント公爵の理不尽な命令に背く勇気もない様子だった。ただ、レンブラント公爵や乳母にとっては捨て駒でしかなくても、ルチアは件の侍女を気に入っていた。幼馴染のジュリエッタと会う時はいつも笑顔で給仕についてくれて、時には一緒にお

茶を飲むこともあったのだ。
死刑が廃止されたのは罪人が特権階級の場合に限ったことで、後ろ盾のない侍女が国王謀殺を企んだとなれば弁明の余地もなく処刑という可能性もあり、ルチアは到底黙っていられなかった。
それに、侍女が用意した杯には兄王が好む赤ワインが入っていたのに対し、ルチアが差し出した杯に入っていたのは彼が苦手なスパークリングワインだった。
さらには、最初から毒を仕込んだワインボトルを持たされていた侍女とは違い、ルチアは第三者の視線――その時、兄王の護衛についていた自らの婚約者オリバーの視線があるのを確認してから、杯に直接毒を入れている。
正義感の強いオリバーは必ずやルチアの凶行を阻止してくれると信じていたし、実際彼がそうしたことで兄王が毒杯を受け取ることもなかったのだ。
「つまりお前は、兄上が絶対に口を付けないと確信した上で、毒杯を差し出したということか？」
「当然です。兄上様が死んでしまっては、元も子もありませんもの。あの方は、リーデント王国になくてはならない方です」
ルチアがあっけらかんと言ってのけるとフィンはますます訝しげな顔になり、彼女の両肩をぐっと掴んで詰め寄った。
「何故だ。ただ、大叔父と乳母の企みを告発するだけでよかったんじゃないのか。どうしてわざわざ、自ら罪人になるような真似をしたんだ」
フィンと同じことを、兄王も思ったのだろう。彼も今のフィンのようにルチアの肩を強く掴んで、

どうしてこんなことを、と泣きそうな顔をして叫んでいた。
その時は「女王になってみたかったんです」なんて嘯いたものの、祖国から遠く離れた今となっては、わざわざ誤魔化す必要もない。
ルチアは苦笑を浮かべて言った。
「私という罪悪感の象徴から、いい加減、兄上様を解放して差し上げたかったんです」
生まれてすぐに母も兄も亡くしたルチアを哀れんだのは世間の人々だけではなく、運良く事故から生還した兄王フランクも同じだった。
レンブラント公爵や乳母が良い顔をしなかったため、それほど濃密に接する機会があったわけではないが、彼はルチアをたった一人の妹として大切にしてくれたのだ。
一方で、事故の際に腹違いの兄を救えなかったこと、そのせいで正妃も亡くなってしまったこと——その結果、ルチアが生母の顔も同腹の兄の顔も知らないという事実に、兄王フランクはずっと罪悪感を抱いていた。
「本当なら上の兄がリーデント国王になっていたのに。どうしてあの事故で死んだのが、自分じゃなくて彼だったのか。生き残ったのが上の兄なら王妃は死なず、妹も彼らに囲まれて幸せに暮らしていたんじゃないか——兄上様は、私を見る度に後悔に苛まれていらっしゃいました」
そんな優しくて繊細な兄王フランクが気の毒で、そして愛しくてならなかった。
だからルチアは、薄幸の王女に対する哀れみよりも、実の妹にまで命を狙われる孤独な賢王に同情する世間の声が大きくなるように、自らが罪人に成り下がった末にリーデント王国から消えようと考えた。
その結果——いや成果が、今回の流刑だったのだ。
ルチアとしては思った通りにことが運んだと言える。計画は大成功だと胸を張りたい気分だった。
しかし、フィンは何故か難しい顔をしたまま、唸るみたいに言った。
「本来の下手人となるはずだった侍女は、自分が庇われたことを分かっているはずだ。それなのに、名乗り出てお前を擁護しなかったのか」
「彼女はやっと大叔父からもレンブラント家からも解放されたんです。余計なことは言わなくていいんですよ」
「兄上も兄上だ。お前が茶番を演じていることを見抜けなかったはずはあるまい。それなのに、何故流刑の執行を止められなかったのか」
「私は、多くの人の目がある場面で現行犯として捕まりました。いくら本気で兄上様を害する気がなかったとしても、実際に毒杯を差し出している時点でどうあっても罪は免れません。兄上様が刑の執行を止める理由は、何もないんです」
ルチアが淡々と答えれば答えるほど、フィンの表情は険しくなっていく。
彼みたいな第三者の目には、ルチアの行動は独り善がりで、彼女が流刑者となることを止められなかった祖国の面々はさぞ薄情に見えるのだろう。
今やフィンの手は、ルチアの肩を痛くなるほどの力で掴んでいた。
「最も納得できないのは、婚約者とやらの所業だ。そいつは何故、周囲にそうと分からないように

お前の行動を阻止しなかった。公認の仲ならば、国王の前ででもお前に話しかけることができただろう」
「彼も、とっさのことで気が動転したんじゃないでしょうか。おかげで私が悪役だと周囲に知らしめられたので好都合でした」
「そもそも婚約者は黒幕である大叔父の孫だと言ったな？　大叔父がよからぬことを企んでいると、そいつがまったく知らなかったというのか？」
「彼が兄上様に心酔しているのは有名でしたからね。大叔父も、彼を仲間に引き入れるのは諦めていました。兄上様が亡くなりさえすれば、私にだけ忠誠心を向けるようになるだろうと考えていたようです」
ルチアの婚約者オリバーは、白い肌に金色の髪と緑色の瞳をした――まさに、前世で言うところの白馬に乗った王子様のイメージそのままな好青年だった。
前世の意識を引き摺るルチアにとって婚約も他人事のようだったが、彼個人に関しては人間的に気に入っていた。彼が兄王の優秀さを正しく理解し、深く尊敬しているのを知っていたのだ。
だからこそルチアは、事件後早々に婚約を解消されたことに傷付くどころか、自分の存在がオリバーの今後の出世を妨げる心配がなくなったことにほっとした。
彼には、自分のことなど早く忘れて、別の女性と幸せになってほしいと願ってさえいる。
ルチアの全ての行動は、元はといえば何もかも自分のためにやったことなのだ。
兄王を罪悪感から解放してやりたいと言ったが、ルチアの方も自分の存在が彼の負い目となって

いるという罪悪感から解放されたかった。
十八年間過ごした祖国に二度と戻れないことや、確かに血を分けた兄であるフランクとの永遠の別れに何も感じないと言えば嘘になる。
しかし、お互いの心の平穏を得るためには、これがベストだったのだ。
兄王も最終的にはその結論に至ったから、ルチアをこうして新天地へと送り出したのだと、彼女は思っている。
しかし、フィンはそうではないらしい。
彼は険しい顔をしたままルチアの前に腰を落とし、帽子のつばに隠れていた彼女の顔を見上げて口を開いた。
「兄上や婚約者が――リーデント王国がお前を捨てるというのなら、俺がもらう」
「え……？」
フィンは一方的に宣言すると、がばりとルチアを抱き上げて歩き出す。
彼女にペースを合わせていた時とは一転、脚の長さを活かしてずんずんと大股で進んでいく。
高速で後ろへ流れていく景色に目が回りそうになったルチアは、とっさに目の前の首筋に両腕を回してしがみついた。
自然と間近で向かい合うことになったフィンの瞳に真っ直ぐ見つめられ、ドキリと胸が高鳴る。
今世を客観的に見過ぎるあまり自分の感情に疎かった彼女でも、この時一瞬、自分がフィンの強い瞳に魅せられたことを自覚した。

「百日が過ぎても、この島で確実に生き残れる方法を教えてやろうか？」
「え？　は、はい……」
ジュリエッタの持ってきた『無人島で百日間生き残る方法』のタイトルを踏まえて言われているのはすぐに分かった。ルチアが勢いに押されるように頷くと、フィンはにやりと唇の端を吊り上げて続ける。
「俺の伴侶となることだ」
「はあ……はん、りょ……伴侶!?」
唐突な話にルチアが面食らった、その時だった。
突然、一面の緑に覆われていた視界がぱっと開ける。
そうして目に飛び込んできた光景に、ルチアは思わずあっと声を上げていた。
「ここは……」
未開のジャングルの先は、急な下り坂になっていた。
擂り鉢状に凹んだ盆地の中央には湖沼が見え、その周囲には区画された田畑が広がっており、それを世話する人々の姿もある。
一方、対面には凸凹した岩石の地層がそびえ立ち、クリーム色の岩肌を削って住居が作られていた。それはまるで……
（洞窟ホテルみたい――）
そんな感想を抱いたルチアの頭の中で、唐突に、カチリと音を立ててパズルのピースが嵌まるような感覚があった。
とたん、一気に甦ってきたのは、これまで曖昧だった前世の最期の記憶――
（そうだ、私……洞窟ホテルに泊まる予定だったんだ……カッパドキアの……）
彼女はその時、親日国としても有名なトルコ共和国を目指していた。
アジアとヨーロッパの中間――東西世界が出会うエキゾチックなかの国には、世界遺産にも登録された遺跡が数多く存在する。中でも不思議な形の岩が連なるカッパドキアは、それを利用したホテルが魅力の一大観光スポットである。
そんな異国の神秘的で優雅な空間に憧れて、前世のルチアは一週間の休みを取って飛行機に乗ったのだ。きっかけは他にもあったような気がするが、あいにく今は思い出せない。
飛行機の隣の席には、旅の相棒である幼馴染が座っていた。
空の旅の途中、突然機体が大きく揺れ出し乱気流に巻き込まれたことを悟ったが、為す術もなかった。あちらこちらから悲鳴が上がり、手荷物が飛び交う中で、前世のルチアがとっさに握ったのは幼馴染の手。
震えながらも強く握り返してくれた彼女の手に、意識が暗転するその時まで――自らが絶命する瞬間まで必死に縋った。
そんな感覚が、当時感じた恐怖まで引き連れてまざまざと甦ってくる。
この時、前世の幼馴染の手の温もりと共に、数日前の別れの際に握り合ったジュリエッタの手の温もりを思い出したのは何故だろうか。どちらも離し難かったという共通点はあるにしろ、不思議

なことだ。
とにかく、ルチアの頭の中は混乱し、心臓がバクバクと激しく打っていた。
しかしフィンは、目の前の光景を凝視して口を閉ざした彼女が、今まさに前世の幕引きの瞬間に意識を飛ばしているなんて知る由もない。
彼はルチアの震える身体をしかと両手で抱き直し、その耳元に彼女の今世の新たな幕開けを宣言した。
「ようこそ、流刑者の集落へ。――俺が、ここの現在の長だ」

第三章　流刑地二日目、午後

ジャングルを抜けるとすぐ、植物の蔓が絡み付いて緑のトンネルみたいになったスロープがあった。フィンによれば、これこそが昨夜幽霊となってルチア達の前に現れたあの大蛇ヴォアラの遺骨だという。
長身の彼が立って歩いても天井となっている背骨までまだ距離があるのだから、かの大蛇が如何に巨大でとんでもない怪物であったのかがよく分かった。
ヴォアラは最期、水を飲もうとしていたのか、長い胴の骨は盆地の中央にある湖沼の縁まで伸び、頭蓋骨はその畔に立つ大木の側にまるで守り神のように鎮座している。
周囲に広がる田畑では、フィン同様シンプルなシャツとズボン、革でできたサンダルを履いた男達が手桶で水やりをしていた。
フィンよりも幾らか年嵩で働き盛りの年齢に見える彼らは、ヴォアラの遺骨のスロープから現れた二人に気付いて作業の手を止めたが、無闇に声をかけてくる様子はない。
フィンも彼らの前を素通りし、ヴォアラの頭蓋骨が寄り添う大木――その木陰に置かれた安楽椅子の前へとルチアを連れていった。
安楽椅子には、高齢の女性がゆったりと背もたれに身体を預けて座っている。

「彼女がこの集落の最長老――最初に挨拶すべき相手だ」
フィンはそうこっそりルチアに耳打ちしてから、老婆に話しかけた。
「おばあ、ただいま」
「おや……フィンかい、お帰り。浜はどうだったね？」
「浜は相変わらずだったよ。でも、掛人を一人連れて帰ってきた」
「そうかいそうかい……どぉれ、新しい子。よく顔を見せておくれ」
ヴォアラ島の人々がそのまま〝島人〟というのに対し、〝掛人〟とはルチアのようにヴォアラ島に送られてきたばかりの流刑者を指す呼び名らしい。しばらくは島人の助けがないと生きていけないので、基本は居候や食客扱いになるとのことだ。
集落の長の役目にはそんな掛人の保護も含まれているため、フィンは島に流れ着いた者がいないかどうか、数日おきにあの砂浜まで足を運ぶのだとか。
ちょうどその見回りの日時にヴォアラ島に到着し、早々にフィンに拾われた昨日のルチアは相当運がいいと言える。そうでなければ、数日は一人ぼっちでサバイバル生活をしなければならないところだった。
安楽椅子に座ったまま手招きする老婆に応え、ルチアは帽子を脱いで彼女の前に腰を落とす。
すると、老婆の手がゆっくりと伸びてきて、幼子を慈しむみたいにルチアの頭を撫でてくれた。
それによって思い起こされたのは、前世の祖母の優しい手だ。今世においては、父方の祖父母はすでに亡く、母方の祖父母もレンブラント公爵に頭が上がらなくてほとんどルチアに関わることがなかった。
「初めまして、奥様。ルチアと申します。海の向こうから参りました」
懐かしさを覚えながらルチアがにっこりとして挨拶をすると、老婆も皺くちゃの顔をさらに皺だらけにして笑顔を作る。それから、ルチアの頬を両手でそっと包み込み、殊更優しい声で言った。
「こんな遠いところまでよく来たねぇ。わしのことはおばあちゃんと呼んでおくれ」
「はい、おばあさま」
「可愛い子だねぇ、フィン。大事にしておあげ」
「分かったよ、おばあ」
ルチアに帽子を被せ直した老婆が、彼女の手を取ってフィンに預ける。
その直後、ルチアはフィンがこの老婆を最初に挨拶すべき相手と言った意味を知ることとなった。
「うわぁあ！　やったなあ、フィン！　女の子じゃないかっ!!」
「随分若いなあ。年は幾つだい？」
「歓迎会！　歓迎会をしようっ!!」
それまでルチア達を遠巻きにしていた人々が、わあっと寄ってきて一斉に話しかけ始めたのだ。
いきなり大勢に囲まれて面食らうルチアを庇いつつ、フィンは呆れた顔をして口を開く。
「みんな、落ち着いてくれ。彼女は島の環境にも気候にも慣れないまま、昨夜はジャングルで過ごしたんだ。ひとまず休ませ、歓迎会は夕食を兼ねて夜に執り行おう」
フィンはこの集落の長だというが、あくまで集団のまとめ役といった立ち位置で、島人の中で優

位に立っているという雰囲気ではなかった。
島の外から来た余所者に最初に話しかけるのは、長であるフィンを除けば最長老の老婆でなければならず、彼女に認められてようやく仲間入りすることを許されるらしい。
まずは年上の者を立てる、前世で日本人だったルチアにはある意味馴染み深い年功序列社会のようだ。
「基本、おばあは来る者拒まずだ。ただ、島人の四半は彼女の血族だから印象を良くしておくに越したことはない」
「心得ました」
フィンの耳打ちにルチアはこくこくと頷く。長いものに巻かれるのは、前世でも今世でも得意だった。
「なあ、新入りのお嬢さん。どこの国の生まれだい？」
周囲を取り囲んだ人々の中から、そんな質問が飛ぶ。
リーデント王国です、とルチアが答えた、その時だった。
「――リーデント!?　ちょ、ちょちょ、ちょっと！　それ本当なのっ!?」
突然、人垣の向こうから素っ頓狂な男の声が上がる。
続いて、ガンガンガンと何やら固いものを打ち鳴らすような音が響き、その場にいた人々が一斉に音の出所を振り返った。
人垣が割れて声の主の姿がルチアの視界にも入る。

立ち読みサンプルはここまで

亜麻色の髪をした若い男が、クリーム色の岩肌の窓から上半身を乗り出して、左手に持った大きなフライパンを右手に握ったフライ返しでガンガン叩いていた。
そのけたたましい音に、フィンが眉を顰める。
「うるさいぞ、マルクス」
「フィン、お願いだよ！　僕にその子を紹介してっ!!」
「言われなくても、後で全員に紹介する」
「それ絶対？　絶対だよね!?」
マルクスと呼ばれた男は、その後もフィンに何度も念を押して、くどいと一喝されていた。
言動は女々しいが、がたいは大きく、案外凛々しい顔つきをしている。
マルクスはコックということなので、彼の腕の立派な筋肉は重いフライパンを振り続けた結果付いたものだろうか。
そもそも彼がフライパンとフライ返し持参で窓から顔を出したのは、集落中の人々に昼食ができたことを知らせるためだったそうだ。
ヴォアラ島には現在、百九十九人が生活しているという。
その内訳は、十八歳未満の未成年が六十九人、十八歳から六十四歳が百二十人、六十五歳以上が十人。
ルチアが加わることでちょうど二百人になる島人は、この島の生態系トップに君臨していた、かの大蛇が死んだ三百年前以降にやってきた流刑者とその末裔だ。